

隨想



立像・石阪春生

椎名麟三生誕80周年 文学展に向けて

田 麟三
新
作家



姫路市が市政百年の記念事業として文学館を建設。来年三月にいよいよその開館が迫ってきた。郷土にかかわった詩人の有本芳水、民族学の柳田国男、哲学の和辻哲郎、作家の阿部知二、椎名麟三ら十名の展示コーナーが設けられる。

姫路城を借景にした安藤忠雄設計の文学館は、県立こどもの館とともに、また市民の話題を呼びそうだ。

文学館には各人の著書類の文献をはじめ遺品や生原稿などコーナー毎に立体展示される。郷土にいざれも熱いエネルギー

をのこした先人たちの業績や痕跡がわずかであっても、いま住んで

いるわれわれが、日常生活のなかで、少しでもそのエネルギーにふれ、何かを再発見することで、先人たちの生き方を身近なものにできなくなるだろうか。

美術館や博物館への散策で、歴史にふけったり、恋をしたりする空間が、文学館誕生でまたひとつふえるわけだ。

お城を囲むみどりの回廊、堀をめぐる深い水色、船場川のながれ。こんななんでもない、なじんだ風景の延長に、やがて美術館や文学館が人々の心と溶けあうとき、姫路がほんとうの文化都市としてのかがやきを見せるのではないかと、そんな気がしてくるのだ。

文学館での展示で、とりわけ椎名麟三にかかわってきた小生には、ここ二、三ヶ月の間にも新し

い資料の情報が伝えてくる。
その一つに演出家川和孝さん、
最近筒井康隆作「スター」を演出
した方で、ある九月の夜、
「そもそも椎名さんに芝居を最初
に書かせたのがボクですよ」
「あれ、ホントですか」

「天国への遠征」（一九六一年）

の生原稿を持っていますよ」

「いや、オドロキました。写真でも、手紙でも、コピーでいいです
から、展示の際にお借りできませ
んか」

「ホンモノをお貸しますよ」

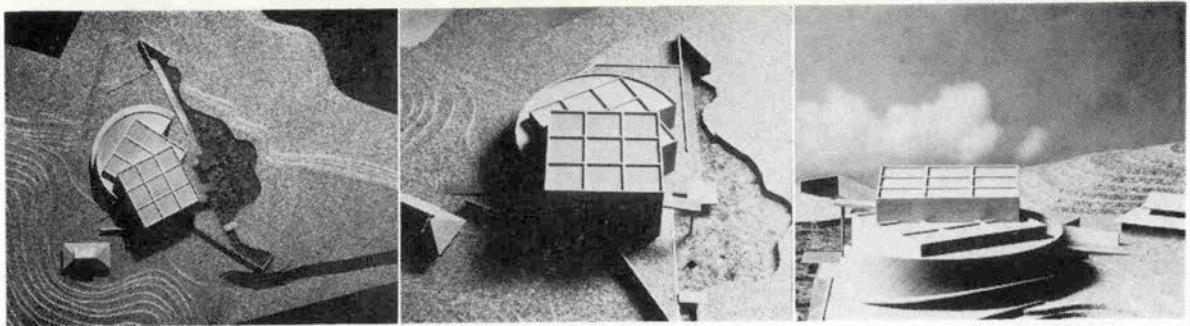
もう一つは、椎名と同じ地に山荘をもつ山下肇さん（関大文学部長）の蓼科からの暑中見舞であ
ります。

来春、東京宅へ引揚げますが、
その際、書庫の整理をやりながら、
椎名さんからの手紙を心がけてお
きます——といった内容である。

お二人方との出逢いも、街角でのひよんなことがきっかけである。しかもそんなとき、隠れていた貴重な資料が突然に火を噴く。

これも椎名の一種のエネルギーであろうか。新資料は向うからやつてくると、そんな夢心地にさせるのも天国にいる椎名のせいに違いない。

来春三月末、文学館開館に併せ
山陽百貨店画廊で生誕八〇周年の
椎名展を準備中である。



姫路文学館の模型写真3点<設計・安藤忠雄>

■同館に対するお問い合わせは
姫路市教育委員会文化部
☎ 0792-21-23338まで

原風景

小泉八重子



△作家▽

作家や画家はその作品の中に、自らの原風景を知らず知らずに描いていることがあるという。或いは繰り返し、或いは制作が行き詰まつた時、無意識に心奥を掘り起こすのかも知れない。私なども俳句の中にしばしばそれらしい景を詠むことがある。何だか遠い所から自分を呼ぶ声が聞こえるような気がし、無性に懐しくてそれに応えたとき一句が生まれるよう思う。

では原風景とは何だろう。

母の胎内にいた頃から、精神の形成がされてゆく時間の中で、その柔らかな脳が覚えた最初の感動、最初の景が幾度も存在しているのではないだろうか。そして思いがけない時に、魂を揺さぶる程のなつかしさを伴って出現していくのである。

最近、続けて文人の画展を観る機会があった。大雅、蕪村、華山、鐵斎など有名なそれら独自の風景世界に惹きこまれながら観賞してゆき、私の足は或る一点の山

水画の前で動かなくなつた。

それは岡田平江の画であったが他の大半が中国独特のそぞり立つ巖山、嶮しい崖などの絵の中、その半江の画の山は故郷の山のようにになだらかで、川と林と村落を配し、中で一軒ほつりと離れた家が山裾に描かれている。その家の裏から山へ通じる一本の細い道が見え、私の目はその杣道に釘づけになってしまった。何か胸の中から激しく突き上げてくるものがあり、やがて一つの景が鮮明に蘇つてきたのである。

私は四歳位まで生野銀山の村で育ったが、ある日、何故か理由は判らないが山へ入った父が夜になつても帰つてこないということでお騒ぎになった。この画と全く同じで、家のすぐ裏が山であった。

その山へ入るのに林道のような細い道があり、その道は三歳位であつた当時の私にとって、何か巨大で怖ろしい場所に通じる入口であった。しかも昏れて真っ暗となつた山中へ父を探しに、母もその道へ入つて行つて姿が見えなくなつた時、このまま父も母も帰つてこないのでないかといふ怯えと悲しみで、泣きたいのをじっと抑えていたように思う。犬がしきりと山に向かって吠えていた。

しかしその場面で私の記憶はビタリと途絶えている。

その後も父母との生活は続いたのだから、この時父母は無事に帰つて来た訳で、さぞ嬉しかった筈なのにその後の映像は何もない。ただ山の濃い間に入る一本の道と、そこへ入つて行つた母の後姿のみが鮮やかに残つてゐるだけである。

岡田半江の画は華美ではないが概してやさしさがあるよう思ふ。そしてその山道は、私をなつかしい原風景へと誘つてくれたのであつた。

虚空藏菩薩

山田 幸平
（作家）



日本的な表情を持つ虚空藏菩薩



今一番興味のあることは何かと聞かれると、まだ海のものとも山のものとはわからないので、初めてこういう場所に書くのだが、日本の芸能の源泉をどこまでさかのぼることができるかという問題だ。ある大学の大学院で、芸術学特殊講義という名目で、日本人の身振り、行動、または表情というものの歴史を探るという思索の時間を持っている。そのため日本のあちこちを調査してきたが、まだ行かねばならぬ所がたくさんある。日本人の表情という点では、中尊寺の一字金輪仏坐像のお顔がま

ことになつかしい。平泉に残されたこの秘仏は、仏像として優れる以上に、日本人の表情の原型のようなものが映しとられているという意味で重要なものだ。この秘仏とほとんど同時に制作されたと考えられる虚空藏菩薩を今年の初夏に観る機会があつた。

仏像の安置されている地は、岐阜県郡上郡白鳥町石徹白（いしとろ）、長良川の水上で、もうすぐ福井県という県境の高地である。藤原秀衡が寄進したと伝えられるが、その折り奥州からこの仏像と共に下向した上村十二人衆の子孫上村修一氏に案内してもらった。

実に美しいが、その美しさは日本的としか云いようのない表情を持つおられる。かえってそれが謎めく。暑い夏が終ろうとした九月七日

ふと氣持が動いて、湖東の渡岸寺を訪れた。名高い十一面觀音像を観る。御像の横に回つてその姿態の曲線を眺めたとき、わずかな時間だが、法隆寺の百濟觀音の細身の姿が脳裏をかすめた。

この十一面觀音はたしかに類まれな美しさをもつが、しかし、お顔、姿態も共にエキゾチックな性質の美しさである。しかし家へ帰つて本を開いたとき、この像は、天平八年、勅命によつて僧泰澄がこの像を刻んだという伝承があることを知つた。泰澄上人はあの白山を開いた僧であり、上人ゆかりの白山中居神社に秀衡が例の虚空藏菩薩を寄進したのである。泰澄はいわゆる「帰化人」であつたとも云われている。私はながい幾つの仏像に対面したのであつた。

九州・武雄温泉の 『巨木の里シンポジウム』

水谷 頴介（都市計画家・建築家）

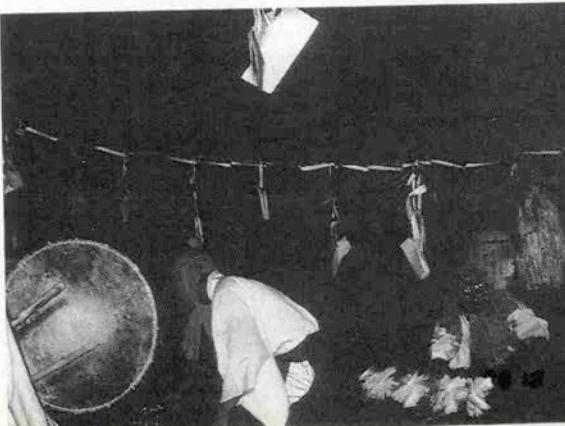
「木」を対象とした私の知識の過程のなかで、今回の「巨木の里シンポジウム」は、3回目の共感する場面だった。

1回目は、今から25年ほど前に、私にとっての木の師匠ともいいうべき故中川藤一さんにつれられて高知の山本森林という林業の現場を訪ねた時だった。そこで、現代の日本の林業地点での経営と都市消費地へ向けての流通・加工の現状および可能性について教えていた。それ以来、日本の木はもうなくて高価なのだというそ

れ迄の常識の間違いを改めて、樹齢30~40年の心持小径木の杉・檜をせつせと活用して建築の設計にとりこんでいる。2回目は、伊勢の神宮工作所を見学して伝統木造の現物にふれた時である。これだけの立派な檜を集めてゆっくりと乾燥させ丁寧に加工するためには20年という遷宮期間は必要だなと実感したり、こういった現場を開いていくことによって、国家神道の枠を超えた見方や姿勢をオーブンに示してみればいいのに、と思つたりした。

ところで、この「ふる里創生——巨木シンポジウム——緑からのメッセージ」は、今年6月の環境庁の「全国巨木巨樹調査」で武雄市内の2本の楠——樹齢3千年といわれる「川古（かわご）の大楠」がベスト3位、「武雄の大楠」が6位にランクされたことをきっかけに、全国一高い八村（やむら）杉がある宮崎県椎葉村と共同で、10月5日開催された。前夜祭には、

「武雄の大楠」前での椎葉神楽の舞



「武雄の大楠」の前で伝統芸能の武雄・真手野舞浮立と椎葉神楽が披露された。かがり火のなかで舞う椎葉神楽が始まったとたん、なんともいえぬ感動で体がふるえてきた。単調ともいえる調べではあるが、舞の個々の動作は神秘的で、古代の森の中での舞がよみがえってきた。その後は、旧錦島庭園、現在は文化会館の立派な庭園で園遊会が開かれ、椎葉村のシカ錦などがふるまわれたプレシンポジウム。

当日は、まず梅原猛氏の基調講演。弥生時代に入つての2千年間の稻作水田農耕のおかげで縄文時代からの森が日本には残り、森を書いた宮沢賢治の作家としての

破壊してきた小麦と牧畜のヨーロッパや中国とは違つて、森が国土の60%をおおつているという「森の文化」の認識がいま大切だという、吉野が里シンポジウムにつづく梅原メツセージは、3千年の楠に臨んで説得力があり、格調が高かった。

森の樹靈をとおして神を感じ、「この世」と「あの世」の循環の思想を信じてきた日本人のこころのあり方を世界にむけて主張していくことによつて、この地球文明を救うことができるはずだ、といふ論旨である。そしてまた、こういう世界を想つて多くの児童作品を書いた宮沢賢治の作家としての

評価を見直そうという話も加わった。

木についてのエッセイスト牧野和春氏は、これらの「木」は何故幾千年も生きつづけてきたのかといふ話の中で、用材としては必ずしも適さなかつたという条件と、神としての存在の「木」に幾代もの権力者達も触れられなかつたのだろう、と説明を加えた。

樹木学者の伊藤秀三氏やモンキーセンター所長の河合雅雄氏は、

現代から未来に残す森として、かつて町や村に近い存在だった里山の再生を、例えばシイ、カシ、クヌギなどのドングリ山を造成して、人工林がつぶしてきた多くの生物達や植物類との共生を唱えてい

た。

児童文学作家の工藤直子さんは、スケールの大きい梅原氏の話を聞いて、『人道雲猛さん』という愛称でうけとめ、大空の雲を眺めて育つていく子供達の夢や、生物達の気持を擬人化してのいくつかの詩を朗読し、当日会場に招かれた市内の500人の高校生達から共感の拍手を誘つて会場をやわらげていた。

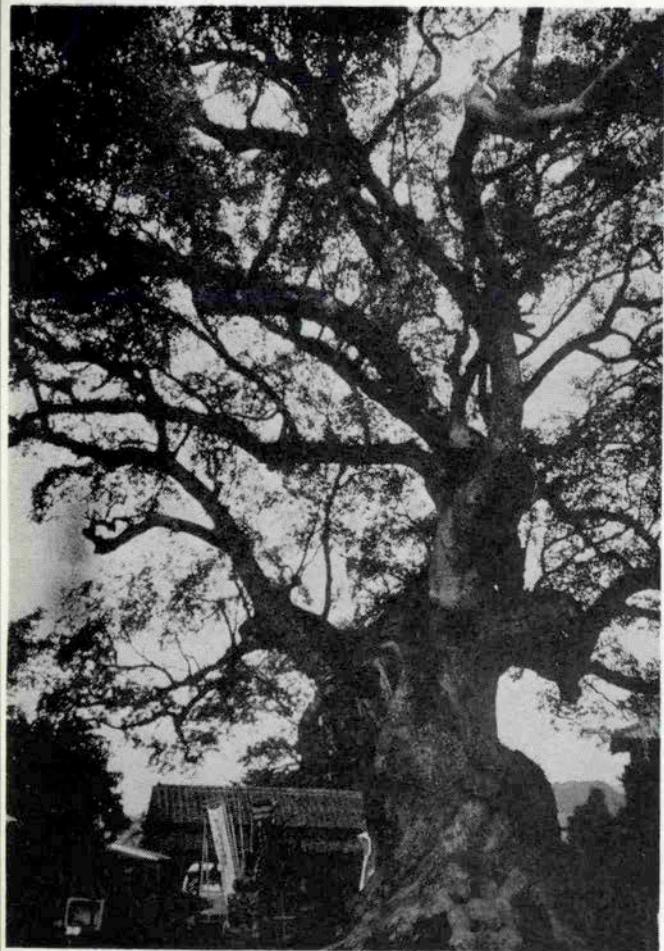
明朝に、『川古の大楠』を見学にいった。朝日をあびての大楠はまさに壯大で、根元からあちこちによじれ、枝々がまさに雲のように八方にのびている。樹のたもとに、母堂がそこに住みつづけていたという説明があつて高田保馬

先生の歌碑があり、だいぶん古びてくずれんばかりの水車小屋があった。ちかく修復する計画もあるそうだ。

ここへくる途上に立寄った鍋島家の菩提寺である円応寺は、中国風の門などがあり、屋根をかけた鍋島家代々の墓が並び、興味深い。ただ、ここも傷みがはげしく、急速の修復が求められる。また、帰路に眺めた松尾家の屋敷は、白壁がつづき丘の中腹に位置し、聞きにまさる立派なたたずまいだった。

造り物の花博を前にして地球環境を論じるむなしさに比べて、まさにテーマにふさわしい現場での、実り多い集いだった。

樹齢3千年的武雄・川古の大楠



■ さんちか25周年記念パーティー

神戸文化の発展と 地域の先導者として



宮崎辰雄前神戸市長を囲んで、笹山市長（中央）石阪春生画伯、森本泰好神戸地下街専務ら（右から）

会場には約50名の方々が招待され、田淵榮次神戸地下街㈱社長の挨拶、笹山神戸市長のお祝の言葉が述べられた。次に、地下街建設の立案者であった宮崎辰雄前神戸市長に花束と満場から拍手が贈られ、飯田存さんちか名店会会长の乾杯の音頭でなごやかな会が始まつた。

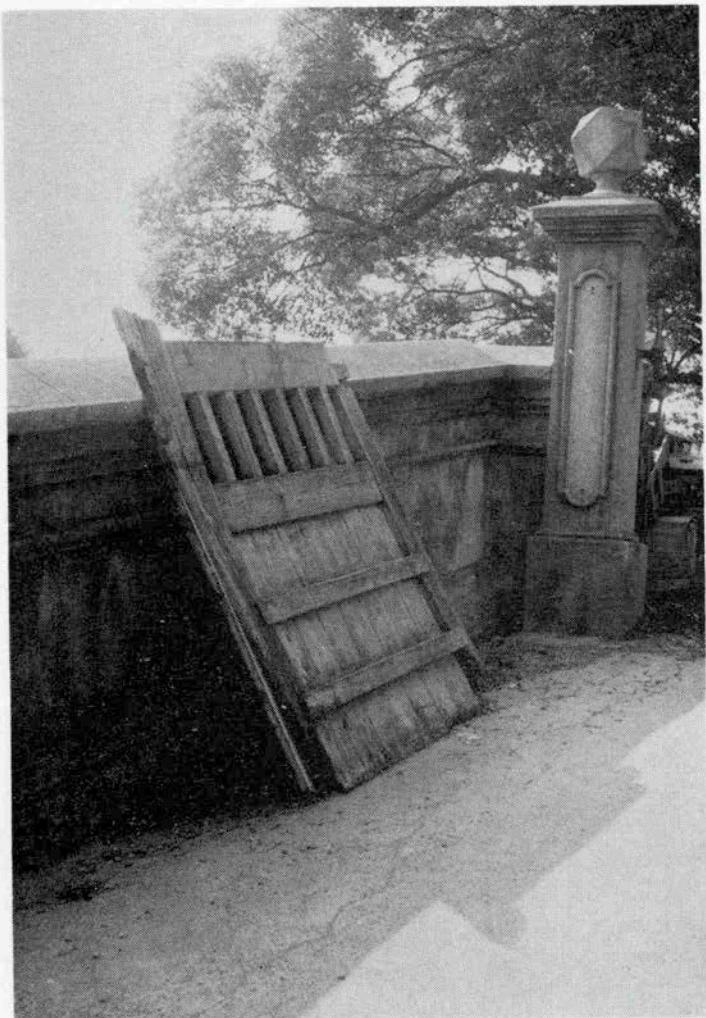
壇上では、神戸地下街の経営する北野のホワイトギャラリーで個展を開催中であった石阪春生画伯やさんちかギャラリーで10月10日まで行なわれた“神戸の誇る安井賞受賞作家4人展の西村功・中西勝・堀江優画伯の紹介もされた。ホワイトハウスは低料金で、さんちかギャラリーは無料で、市民から気軽に文化に接することできる場として、神戸の文化人達の発表の場として人気を呼んでいるが、今後益々力を入れ神戸の文化の掘り起こしと発展に寄与して欲しいものである。

25周年を記念してさんちかカードも一新され、利用エリアはさんちかだけに限らず世界で使用できる国際カードとなつた。

風 雨 に めげず

文・写真
△元・新聞記者▽

この初秋、関東から来た孫娘を連れて北野町へ行つた家内が、帰宅して驚きながら語った。
 「土、日曜でもない平日なのに、通りは人でいっぱい、旅行団体らしい人にも何組も出会つた…。」
 花博とセットの旅かも知れない。それにしても遠くの人々にも花博同様の魅力になつてゐる、いまの
 この町のすばらしさ！
 孫娘がアンティークでカラフルなかごを買って来てニコニコしている。床の間の飾りにするのかと思
 つていると、クズかごだそうである。竹を薄くはいで編み上げ白いラッカーをぬり、花模様をたくさん
 つけて輝くような見事さである。帰東して知り合いたちに自慢しているそうだ。

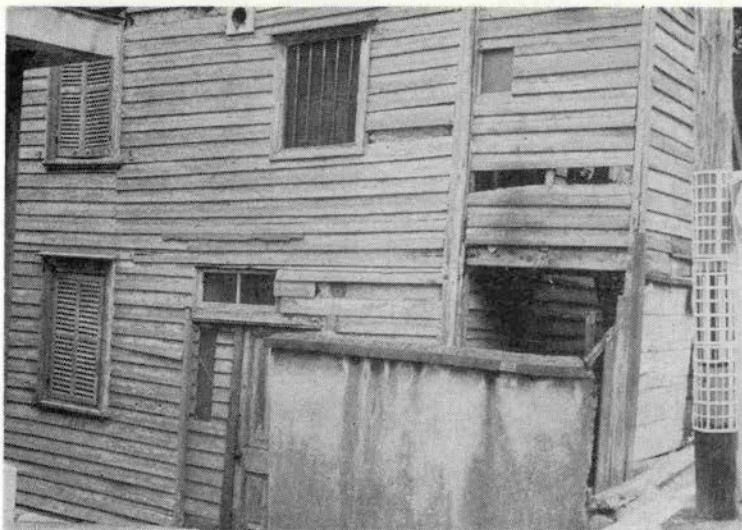


写真A ハンター邸の門扉。1969年撮影。

ハンター邸の門扉

さて二、三十年前から何度か歩いてとった何十枚かの写真を見直していると、いまでも心を打たれるのは明治、大正初年以来風雪に耐えて来た異人館の姿である。有名なところは移築されたり、改修保存されて参觀者で賑わっているが、そうでない建物の面白さである。その多くは現在では改築、新築されて見られないであろう。

まず写真A。もとの小林秀雄氏邸、いまの名の「萌黄の館」の北側の通りを西へ進み、左から出



写真B 1969年1月～2月撮影。北野通の西北方面か。



写真C 1974年撮影。シュエケ邸西横の小径を南へ、西向きに建っていた2階建。いまは改築されている。

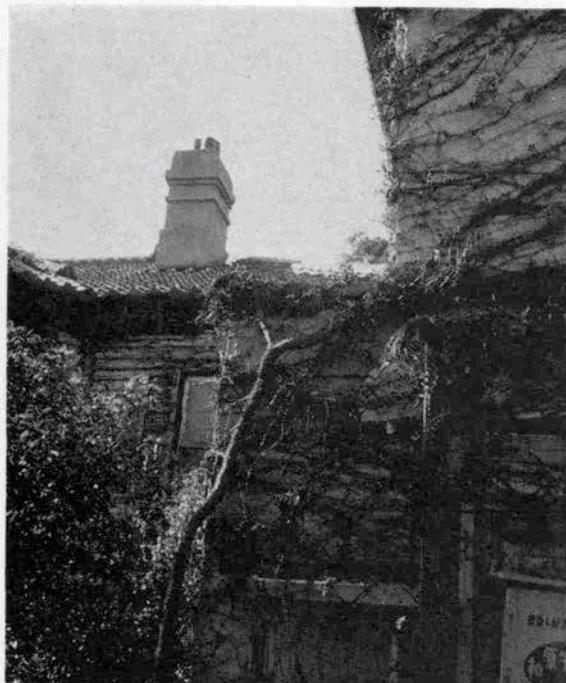
会うハンター坂に入り、登りつめたところに門柱が見えた。横の塀に大きな門扉の半分が立てかけられているではないか。

一九六九年—昭和四十四年の撮影。このころはハンター邸は移築済みと思われ、残されていたこれらの姿がひとしおなつかしい。

写真B、同じ年の一月か二月にとった。場所は北野通の西北あたりと思われる。板塀が古くなっているが、日本風の手入れを行わず、古びたままの姿をとどめてあるのが、なんとも奥ゆかしい。

二階の窓と板壁

写真Cは一九七四年にとつたもの。異人館通の西部にあるシュエケ邸の西横の小径をよく歩いたが、南へ入って東側の二階建。窓のワクが古び、板壁も歳月を物語って、針金で守られていた。いまは美しく改築されている。写真Dは一九七一年のもの。二階までも被うたツタが見事であった。華僑総会の少し西の方にあったと思う。

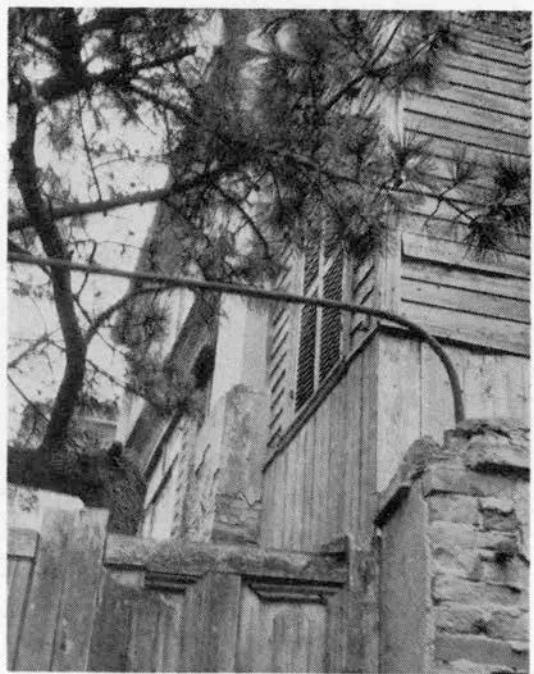


写真D 1971年撮影。ツタが見事。華僑総会の少し西の方にあったと思う。

門の中の松の木

写真E：一九六九年うつす。北野通の西北部、たしか門標は外国人であつた。この松の木の右の建物に、一、二階を通じて出窓がついていた。門は東面していたが門柱のレンガが傷んでいるのも古めかしかつた。こうして並べると、すべてが心の打たれる。

発展する北野町に心よりお祝いを申し上げながら……。
(終)



写真E 1969年撮影。東面していた外人住宅(?)

□トランペット片手にブラジル一人歩き△30▽



パライゾ界隈と ベイジヤフロール

繪と文 右近 雅夫

（在ブラジル・サンパウロ）

毎朝、六時十五分になると枕元のラジオが鳴り出すので僕は目をさます。先に起きてアイロンがけをしていた家のマリアが持つて来てくれたシャツとズボンに着替えて、角つのパン屋にパンと牛乳を買いに行くのが僕の日課だ。エレベーターで降り、アパートの建物の屋外に出ると、中庭に敷きつめられた石畳はまだ夜露に濡れてしつとりとしている。入口の門番がボタンを押し、鉄格子の自動扉を開けてくれる。ブラジルは治安が悪いのでほとんどのビルは高い鉄格子で囲まれ、昼夜門番が警備しているのである。門の前の歩道の一角だけは中庭のと同じ石畳が敷かれてあるが、僕はこの中世的な石畳がとても気に入った。アスファルトの車道を横断するとタクシーの乗り場がある。早朝だのにもう二、三台のタクシーが駐車しており、歩道に落ちた枯葉を掃いていた顔馴みの運転手のセニヨール・シコが“Bom Dia! Senhor Masao”とほほ笑みながら挨拶する。角っこの信号を渡ったところに“Rainha do Paraiso”と看板のかかったペダリア（ブラジル語でパニ屋の事）がある。この辺り一帯をパライゾ区と

呼ぶのだが、「パライゾ」とは英語のパラダイスの事で、訳すと「天国の女王」という意味になる。この辺りは街路樹が生い茂っているので、新緑を通して輝やく朝日が黄金色にきらめき、まさに天国のようだ。

我々のマンションの正門脇の歩道にも両手で抱えられない程の太い街路樹があり、建物の白い壁と良き調和を保っていた。ところが最近、根っ子の部分に出来た空洞が段々大きくなり、このまま放置しておくと危険だからと市役所が切つてしまつた。切り株を後で見ると、なるほど二センチ程の樹皮の部分だけを残して真ん中は二メートル程の高さまで空洞になっていた。大木の街路樹の多いサンパウロの街では老朽化した大木が倒れて家屋や車等に被害を与える事が時々起る。昨年のことであったが大木の脇に駐車させておいた車の上に大木が倒れ、新車をペチャンコにされた医師が市役所に抗議したが埒があかず、考えた揚句、変り者で有名なジャニオ市長に抗議文を詩にして送り届けた。効果はてきめん、早速市長から抗議に対する返答の詩に添えて新車の代金の小切手を送

り返して来た。大統領にまでなつたことのあるジヤニオだが、市長に就任すると同時に、ロンドンのバスを真似て市バスを全部赤色に塗り変えさせたり、二階建てのバスを建造したり突飛な事をするので有名だった。駐車違反の罰金を従来の三十倍の額に引き上げ、一部の市民の不評をかたが、反面駐車違反はうんと減少した。ある時、彼がファリア・リマ街を公用車で通っていると歩道の上に駐車している車を見つけたので、運転手に車を止めさせ、市長自ら罰金を課そうとした。それに気付いた車の持ち主が向いの家畜の医院から走り出で来て、「実は自分の犬が急病でここへ連れて来たのだが、車を駐車させる場所がなかったので……。」と弁解した。変り者のジャニオ市長は、「時に犬は人間より正直だから……。」と罰金の徵収書に書き添え特別免除するようサインした。

話が市長の奇行に脱線してしまったが、僕の一家はこのパライゾ区の一角にあるアパートの十一階に住んでいる。僕の自慢は応接間に面したテラスで、わずか五平方メートル余りのテラスの端に



Let's play "Bye bye Blackbird".

小さな花壇があるので、いろんな花や観葉植物を植えている。陽当りが良いので、母からもらった「月下美人」(サボテン科)や白い花弁の真ん中から赤い小さな花弁を覗かせた「クリストの涙」という花等は年に二回も花を咲かせた。テラスの手摺には春から夏にかけて深紅色の花を咲かせるPrimaveraを這わせ、手摺の鉄柵に砂糖水を入れた小瓶を吊しておくと、ベイジャ・フロール(蜂雀)がたくさん集つてくる。英語ではハミング・バードと呼ばれ、北米から中南米大陸一帯にかけて生息している小鳥で、黒っぽい頭に細長い嘴が特長で近くで見ると背中や胸の羽毛が紫、青、緑等の黄金色に輝いて見える。テラスの斜め下に塔のついたちょっと神戸の異人館を想わせる邸宅があり、庭に緑の大木が生い茂っているので、そこに巣があるらしく、十一階のテラスまで一気に舞い上つてくる。他の小鳥と違つた翼の構造をしているらしく、羽を扇風機のように振動させながら空中に停止、砂糖水を飲み終えると後進し、急降下して行つてしまふ。生まれたての四セント位の小さいのから、成鳥になると十センチ程の大きさになるがいつも腹をすかせているらしく、雷雨の中でもまた、夜暗くなつてからでも「チッチッ」と鳴きながらテラスにやつて来る。僕の誕生日の日にピアニストのリカルドやベースのマウリシオ達を家内が招いたので「ディナーの前に少し演奏を楽しもうよ！」と言つてトランペットを取り出して吹いていると、いつの間に集つて来たのか数羽のベイジャーフロールが「チッチッ」と鳴きながら空中に停止して、もう暗くなつたテラスの方から演奏している僕らを眺めていた。僕は飛び入りの聴衆に敬意を表すべく "Bye Bye Blackbird" を演奏したが、忘れ得ない誕生日のハイキングであった。



・珈琲のみながら…

息づく花で 日本を表現する

世界に向けて
作品集を発表した花人

川瀬敏郎

さんにきく

インタビュア 川瀬喜代子
<にしむら珈琲会長>

日本の「たて花」を現代に甦らせた川瀬敏郎さんは、ヨーロッパなどで世界的に活躍する花人——かじん——。

偶然にも本誌でお馴じみのにしむら珈琲店・川瀬喜代子会長が叔母さんにあるたることで、インタビュアを務めて頂いた。講談社インターナショナルから「川瀬敏郎いけばな集」と、淡交社から「花会記—四季の心とかたち—」を次々と出版し、何事に対しても意欲的な姿勢の川瀬敏郎さん。「人生のメインテーマ」と「花」についてのお話が脹らみ、熱い3時間となった。

★環境の中に浮かびあがった花たち

——素晴らしいご本ですね。全て英語で書かれていますが、やはり世界に伝えるという意味ですか？

「ええ。単に『花』を紹介するのではなく、建築の中の花、四季・天候などの中の花、人間（男・女）関係と花など、動かし難い環境の中で浮かびあがった花というのはどんなものか、そしてそれらはどれも日本という国を反映し、表現しているんですね。

花は生きていますからね、とてもこわい世界ですよ。人の持つ生理とつながるものが花にもあって、花と接していると、それがひしひしと感じられるんです。ですか

——では、花と接する上で、こうであるべきだと思われるはどのようなことなのでしょう。

「これは喻えながら、織物を織る場合、「たて糸」とは流行・装飾など変化していく要素、たて糸はそれに反して、基本になるもの・伝統・本質とも言いますか、そういった清々しいものです。人間の中のたて糸は、多くの経験や思考の蓄積から生まれたひとつのことだわりであり、周りのいかなる状況にも影響され得ないものなんです。私も40年程生きて参りましたが、人に何を言われようとして自分のたて糸だけは変わらず持ち続けてきたと思っています。花に対してだけでなく全てに関して本当のたて糸をひいた人間だと思われる様になりたいですね。」

——ではお仕事の上でも人間としても、ひとつのことだわ

りをたて糸にして、日本文化を花に托して表現していくか
れるのですね。以前は京都にお住まいでしたが、そのこ
とも大きな影響をもたらしたのではないでしょうか。

「そうなんです。現在は東京ですが、確かに京都にいた
頃、その中で蓄えた時間というものは、現在の私自身を
創るのに大変重要な役割を果たしてくれていたと思いま
す。本質を失わない為に、いざれは京都に戻りもつと大
きい「たての世界」の研究をしたいですね。」

★「真のエロス」を追求

——伝統をたて糸にして……ということなんですね。と
ころでヨーロッパにはどのくらいおられたのですか?

「2年半程です。そこで学んだことは計り知れない程あ
ります。まず感じたのは、「真のエロスを求める」とい
う私の大きなテーマが非常にヨーロッパ的思考であると
悟りました。日本は「エロス」のない民族なんですね。

ヨーロッパも日本も古い歴史と文化を持っていますが
例えれば日本は、障子、襖一枚で仕切られた中で男女が暮
らしてきました。格子戸や縁側も建築物としては素晴らしい
文化であるわけです。特に着物はもっと顕著にそれが
表われています。ヨーロッパの様に男と女、はつきりと

違うものを持って戦わせてきた文化と、その様な日本の
文化とでは男・女のあり方が必ず違う。つまりヨーロッ
パにはエロスがあるといえるのです。

夫婦というものは男と女ではない、お互い「男」と「女」
を殺したものを天秤にかけてバランスをとっているわけ
です。その殺した分の分量が等しくなければ「夫婦」と
いう関係は上手く成り立たないのだと思います。

私はそういう人間関係の中でのかわりがつくる自分
ではなく、常に個人であり続けたいんです。

幸せというのは、各々の人間関係の中に於て、その人
の価値感でもって幸せかどうか決めるのですからね。そ
の点「ひとり」は求める世界が広がって際限がないでし
ょう。」

——お話を伺っていると、益々意欲が膨らんでいらっしゃ
るようですね。

「ええ。このような本を創るのは、生涯の集大成のよう
な仕事ですよね。このお話を出版社から頂いた時、これ
は何か新しいことをどんどんするようにと求められてい
る気がしてなりませんでした。また「花会記」という本
を出版しますが、これからも日本というこの國の中で本
当の光と影に息づく花たちを映しだしていきたいです。」

——ところで、コーヒーはお好きでしたね。

「ええ、大好きですよ。でも家では殆んど飲みません。
こんなふうに外へ出て大勢の人の中に居る日常の自分自
身を客観的に観ながら飲むのが好きなのです。こここの本
店は大好きで、神戸に来るたびに寄っています。」

——まあ、知らなかつたわ、ありがとうございます。

「にしむら珈琲は40数年守り続けて来られたボリシーを
しっかりと張られたたて糸にして、よこ糸として世代の
ニーズを織り込まれてこられたんだなど、いつも感心し
ています。」

△にしむら珈琲北野店にて▽

川瀬喜代子さん

「川瀬敏郎いけばな集」 定価 7,000円
「花会記―四季の心とかたち―」 定価 6,500円

経済ポケット ジャーナル

★全商品合成保存料無添加
カネテツデリカフーズ

カネテツデリカフーズ株式会社（本社・神戸、村上健社長）は10月1日より全商品合成保存料無添加を開始した。

同社は昭和60年のC.I導入以来、貫して「健康とおいしさ」について考え、蒲鉾や竹輪をはじめとする水産ねり製品だけでなく、中華惣菜などさまざまな食品の開発、生産をはかり、食文化を育てる「総合デリカメークー」として発展している。

グルメブームの一方で、健康食、自然食が見直されているが、生活者は食品に対して単に「味」や「おいしさ」だけを要求するのではなく、「安全性」や食品によってもたらされる「健康」に対しても高い関心を寄せていく。同社でもこのような生活者意識を背



記者会見の様子



★Kiss-FM

開局披露パーティー
県下初の民放FM局兵庫エフエムラジオ放送（Kiss-FM）の開局披露パーティーが、「ホタルサンガーデン姫路」において開かれていたが、今年6月、六甲アイランド内に「六甲工場」を新設し、全商品合成保存料無添加に向け準備を整えていた。

★Kobe オフィスレディ★

今田 充子さん（22）
関戸 利枝さん（22）
（神戸支店勤務）



今年の4月に入社したばかりのフレッシュな2人。経理担当の今田充子さん（水瓶座のA型、西宮市在住）総務担当の関戸利枝さん（蠍座のB型、西宮市在住）は活があり人間関係にも恵まれた職場で毎日楽しく忙しく働いている。

カクテルが好きだという今田さんのタイプは「暖かい人」、ビールが好きだという関戸さんのタイプは「私を引っぱってくれる人」と好みは違うが、「スキーが楽しみ」ということでは意見が一致。



70周年を迎えた
マンソン社



左から米田徳夫副社長、阿久悠会長、上島達司社長

れた。

La（女性）の感性に訴える「インボーレベルトワール（虹の編成）」で開局以来人気も急上昇の同FM。

世界各地のキッズFM局と

提携するなど神戸らしい国際色も打ち出している。壇上に立った上島達司社長は「みなさんに愛されるFM局にするためにがんばりたい」と抱負を語った。

●追悼

去る9月、竹馬準之助さん（竹馬産業株式会社代表取締役会長）砂田重民さん（衆議院議員）下村光治さん（株式会社風月堂代表取締役社長）という神戸区にとって馴染みの深い方々が相次いで亡くなられた。謹んで御冥福をお祈り致します。



下村 光治さん



砂田 重民さん



竹馬準之助さん

明治39年10月18日神戸市神戸区（現・中央区）生。昭和5年3月京都帝国大学経済学部卒業。同年9月竹馬商店取締役、同19年2月会長並びに竹馬グループ名誉会長に就任。同年9月24日午前3時28分、肝不全のため死去。83才。

大正6年3月4日神戸市生田区（現・中央区）に生まれ、立教大学経済学部を卒業。故河野一郎農林大臣秘書官を経て、昭和38年兵庫一区より衆院初当選、以来当選8回。同52年にはわずか当選4回で文相に就任、60年自民党総務局長、61年衆議院予算委員長、平成2年国務大臣北海道沖縄開発庁長官を歴任。同年9月24日、呼吸不全のため死去。73才。

昭和9年7月27日姫路市生。同33年関西学院大学商学部卒業。同36年合名会社神戸風月堂入社。同40年営業部長、同51年専務取締役を経て、同55年代表取締役社長に就任。平成2年9月18日午後11時22分、心不全のため死去。56才。